

巻頭エッセイ

いつか“舵輪”は過去のものになるのだろうか。

高津みなと
古野電気株式会社



親子連れで賑わった今年のジャパンインターナショナルボートショー。展示艇には多くの子供たちが目をキラキラさせながら乗り込んだようで、「まるで遊園地ようだ」とボートメーカーの担当者は苦笑いを浮かべながら漏らしたそう。私が担当している弊社ブースでは、VR空間で航海計器を使いながら船を操船できる「操船シミュレータ」を展示していたが、こちらも負けずと大盛況だった。操船シミュレータには舵輪とスロットルがあり、それらを操作すると実際に画面上のボートが変針したり、加減速することができる。VR空間内で岸壁や他船などを準備しており、実際にそれらがレーダーに連動して映っていることから、まるで航海計器を使って操船体験ができるという代物だ。

しかし子供達はそのようなことはお構いなしにクルクルと船の舵輪を動かし、自由にVR空間内の航海を楽しんでいる。そんな微笑ましい光景を眺めながら、ふとこの子達の将来、船の操縦というのはどのようになっているのだろうかという想いが浮かんできた。現時点でもプレジャーボートにおいてはオートパイロットが搭載されている船も珍しくない。弊社の最新機種ではチャート上でルートを描くと自動でルートに沿って走行することすら可能である（さらに目的地に着くと自動で停止し、定点保持する機能まで有している）。実際私も仕事で操船することがあるが、オートパイロットに頼る場面は非常に多い。

また昨今の衛星通信の進化に伴い、世界中の船舶がインターネットを介して、これまで以上に陸上と繋がろうとしている。そんな中、弊社は日本財団が推進する無人運航船プロジェクト

「MEGURI2040」に参画し、無人運航船の実現に向け、各種要素実験に取り組んでいる。

「MEGURI2040」は2022年1月から3月にかけて、世界で初となる営業コンテナ船を用いた無人運航の実証実験に成功するなど、合計6隻の船舶の無人運航実証を成功させている。さらに昨年7月にはこちらも世界初となる、陸上から複数船舶を遠隔で航行支援する「陸上支援センター」を当社社屋内に開設し、今年の7月から順次実施する実証実験において4隻同時に無人運航船の遠隔航行支援を実施する予定だ。陸上支援センターは非常にスタイリッシュで近未来的な雰囲気があり、最先端の技術を感じずにはいられない。

ご紹介させていただいた「MEGURI2040」プロジェクトでは2040年には国内を走る船舶の50%を無人運航化する目標を掲げている。無人運航船には船舶事故の減少、海運の人手不足の解消など、さまざまな課題の解決につながるものとして大いに期待されている。さらにICTやAI、画像解析技術など日本が世界に対して高い技術力をアピールできる絶好の機会であることは間違いない。全ての船が無人運航となった世界はとても未来的だ。

私は海という大自然を前にすると人間とは如何に小さな存在なのかといつも思い知らされる。フィールドに出ることで海の危険さも楽しさもその身で体感することができる。なによりも初めて海の上で舵輪を回し、船を旋回させたときのワクワクした気持ち。たとえ船の無人化が進んだとしても、そういった学びのチャンス・遊び心といった、船が持つ魅力を新たな形で未来に繋いでいくことも我々航海計器メーカーに課せられた使命なのかもしれない。